

## コース制導入年度における高校キャリア教育の取り組み -生徒のコース選択と教員のコース決定の支援を中心として-

高度学校教育実践専攻  
教職実践力高度化コース  
島崎和彦

実習責任教員 西村公孝  
実習指導教員 大林正史

キーワード：高校キャリア教育，普通科コース制，職業理解，進路選択

### I 課題設定

本実践では、普通科高校におけるキャリア教育の取り組みを行った。また、実習校では平成28年度よりコース制が導入されることとなったため、コース制の導入を契機としたキャリア教育ツールの活用と、生徒および教師に対するコース選択のサポートが主たる実践内容となった。

#### 1. 課題意識

実習校での担任の経験を通じ、卒業後の自分をしっかりイメージして入学していない生徒が多く見られるように感じていた。3年生になってから自分の進路先を検討する生徒が多く、担任として進路先を検討するための相談に乗る時間が長かったように思う。受験するために必要な科目を選択していなかったために、進学先の幅が限定されてしまう生徒も目立った。また、自分の得意分野と希望進路のミスマッチが起こり、進学先選択に苦労している生徒もいた。そのようなことから、早期のキャリア教育を充実させることで、具体的な目標をたてたり、情報を集められたりするようになるのではないかと考えた。

#### 2 実習校の実態

実習校は静岡県西部の歴史ある高校で、普通科6クラス・福祉科1クラスの中規模校である。実践は普通科を対象に行った。普通科の約50%

が大学に進学し、約30%が専門学校に進学する。近年、生徒の高校入学時の進路先未定の割合が徐々に増加傾向にあった。

平成28年度入学生より、コース制が導入されることになっているが、制度設計・教職員の共通理解は不十分な状態である。

### 3 研究課題

研究課題として、以下の3点があげられた。

① 進路希望が明確ではない生徒が今後も増加することが予想されるため、キャリア教育を充実させ、少しでも自分の将来像を描けるようにして、コース選択をスムーズに行うことが出来るようにすること。

② これからはじまるコース制について、教職員間の共通認識をはかること。

未定なことが多いので、平成29年度に着実にコースがスタート出来るようにすること。

③ 生徒がコース選択で迷っている時に、相談に乗れるような体制をつくること。

これらの課題を解決するために、表題の通り実践課題を設定した。

## II 先行理論と先行実践の分析

### 1 キャリア教育の現状

中央教育審議会平成23年1月「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」では、キャリア教育は「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる

能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義されている。ここで示された「基礎的・汎用的能力」は、「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の4つの能力によって構成される。答申では「これらの能力をすべての者が同じ程度あるいは均一に身につけることを求めるものではない」とされており、一つ一つの能力に注目するだけでなく、個性や特徴、発達段階に応じてこれらの能力の発達を促す取り組みを考える必要があると示している。

一方、キャリア教育については、これまでの進路指導、就職指導との違いがわかりにくかったり、あるいはまったく新しい取り組みとして教職員の負担を増やすものと受け止められたりしている実態がある。

## 2 キャリア教育の理論と先行実践

実習においてキャリア教育の理論的土台としたのが、ホランドの職業選択理論である。ホランド理論の基本的概念は、次のようなものである。

- 1 私たちの文化圏において大多数の人は、R 現実的、I 研究的、A 芸術的、S 社会的、E 企業的、C 慣習的の6つのパーソナリティ・タイプのうちの1つに分類される。
- 2 現実的、研究的、芸術的、社会的、企業的、慣習的という6つの環境モデルがある。
- 3 人は、自分の持っている技能や能力が生かされ、価値観や態度を表現でき、自分の納得できる役割や課題を引き受けさせてくれるような環境を求める。
- 4 人の行動は、パーソナリティと環境との相互作用によって決定される。  
(『ホランドの職業選択理論-パーソナリティと働く環境-』 pp. 11-14)

この理論をもととしたツールに、「職業レディネス・テスト」というものがある。これを活

用した実践を考えた。

また、岡山大学教育学部附属教育実践センターにおいて木多が作成したキャリア教育ツールである「Job News!」というものがある。これは、毎日1つずつ職業を紹介し、職業興味を喚起し、自己理解を深めるものである。これを本実践に取り入れ、自己理解・職業理解を深める活動を行うこととした。

進路決定・コース選択行動の参考としたのが、進路選択自己効力理論である。進路選択自己効力を高めることが、コース選択にプラスに働くと考えた。

## Ⅲ フィールドワーク

### 1 対象と内容

実習の対象と内容について、以下の表に示す。

表1 実習の対象と内容

対象	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本年度コース選択を行う高校1年生とする。</li> <li>・コース制初年度であるため、指導に差をつけたくないよう、普通科全員(247名)を対象として、コース選択の手助けとなるようなものとする。</li> </ul>
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高校1年生の自己理解・職業理解をすすめるための取り組みとする。</li> <li>・担任をはじめとした、教職員の負担にならないものとする。これは、制度変更という大きな動きの中で、更なる業務を増やさないためである。</li> <li>・教職員がコース選択の指導に役立つような資料を提供出来るようにする。</li> </ul>

### 2 コース制について

コース制は、平成27年度に校長の強力な推進によって導入がすすめられた。非常に短期間に枠組みが定められたことで、学校全体で取り組む雰囲気がつくられないままになってしまった。

その後、コース制導入の牽引役であった校長が平成27年度末に退職してしまい、さらに実際のカリキュラム作成を行っていた教務主任が他校に異動してしまった。その結果、コース制全

体像が共有されていない状態でのスタートとなった。

他方、コース制の実施は中学校・中学生からの期待感が高く、入学生の進路意識も高かった。

### 3 「Job News!」と職業レディネス・テスト

フィールドワークは主に Job News!の実施と職業レディネス・テストの活用である。

今回作成した「Job News!」は、ほぼ毎日職業を紹介し、「やってみたいか」「自信があるか」を答えてもらい、それを集計するものである。月に1回程度集計・分析した個人票を作成し、個人に配布した。集計にはマークシートを利用したため、分析までスムーズに行うことが出来た。合計67の職業を紹介し、興味・自信を答えることで、自己理解・職業理解を深めることが出来た。

職業レディネス・テストは1回のみ行ったが、「Job News!」と合わせて、多角的な自己分析・職業分析を行うことが出来た。

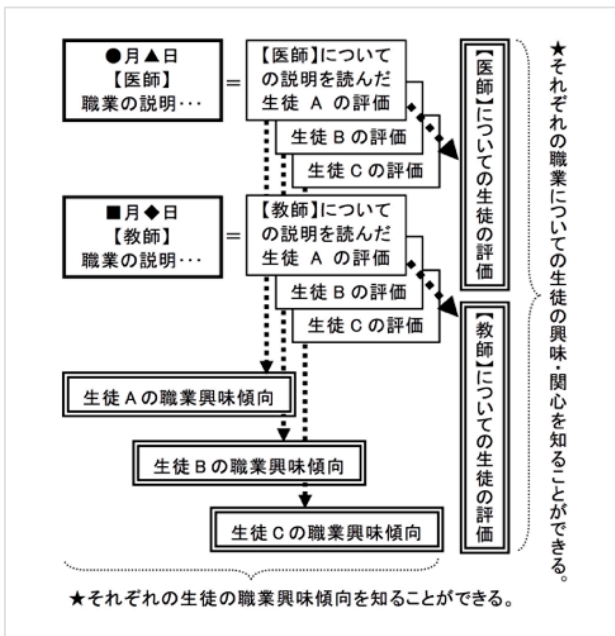


図1 「Job News!」の概念図

The image shows a sample of a 'Job News!' personal ticket. It includes a header with the title 'Job News!まどめ' and a table of job information with columns for Job ID, Job Name, and various evaluation metrics. Below the table is a radar chart titled 'あなたの関心のタイプ' (Type of your interest) with axes for '興味' (Interest) and '自信' (Confidence) for each job. A legend indicates that 'O' represents '興味' and 'I' represents '自信'. The chart shows varying levels of interest and confidence for different jobs.

図2 「Job News!」個人票の例

### 4 キャリア・カウンセリング

必要に応じて、生徒や教員からのコース選択の相談や、進路についての相談を受けた。

### 5 コース制検討委員会と生徒への説明

フィールドワーク期間中にコース制検討委員会と学年会に参加した。コース制の概要説明のための資料作りや、説明を行った。

## IV フィールドワークの成果と課題

### 1 「Job News!」

毎日1つずつ職業を紹介し、マークシートに記入をさせ、回収するという活動は、負担感の少ないキャリア教育ツールとしての役割を果たすことが出来た。特に生徒が新たな職業を知る手段として効果のあるものであったといえる。

他方、集計・分析には課題が残った。

表2 「Job News!」の成果と課題

	生徒	教員
成果	読みやすく、内容も妥当であった。新たな職業知識を獲得出来た。コース選択にも役立った。	配布・回収が容易であった。生徒個人・生徒全体の把握に役立った。
課題	適切な職業が紹介されとは限らない。その後の活用が不十分であった。	集計・個人票の発行に知識・技術が必要である。コンピュータの性能が必要になる。

## 2 職業レディネス・テスト

前述の「Job News!」と連携して、自己理解・職業理解を深めるツールとして活用することが出来た。

## 3 キャリア・カウンセリング

コース選択相談・進路相談は申し出の数は少なかったが、相談を受けた生徒・教員には情報提供をすることが出来た。

## 4 コース制導入の支援

各コースの特徴を分析することで、各コースが今後目指すべき方向と、課題を整理することが出来た。これらの資料については、今後、コース制をすすめていくための基礎的な資料になるであろう。

今回はたまたま希望人数がうまく納まるコースがあったが、生徒の希望動向も年度によって大きく変わる可能性がある。こういったことを踏まえ、来年度以降コース選択をスムーズに行う方略を考えていく必要がある。

## 5 実践の検証

今回の実践の結果、生徒の自己理解・職業理解に一定の成果をあげることは出来たが、生徒の進路選択自己効力の直接的な向上は、データ上はみられなかった（表3）。進路選択自己効力を上げていく手立てについては、今後も検討していく必要がある。

表3 進路に関する指標の移り変わり

	進路選択自己効力		進路選択行動		進路選択行動		
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
平成28年度							
	4月	2.92	0.50	2.87	0.46	2.88	0.64
	6月	2.87	0.50	2.81	0.46	2.76	0.63
	11月	2.82	0.51	2.76	0.49	2.75	0.60

## V 実践の振り返り

### 1 データの分析

全体のデータを分析した結果、具体的な進路を決め、看護・医療コースや産業技術コースを選択し、専門学校へ進学することを考えている

生徒は、大学進学を主として考えている生徒よりも進路に関する意識が高いという構造を見出すことが出来た。

## 2 今後の課題

大学全入時代を迎えている今、専門学校への進学希望は、主体的な進路選択のあらわれであるという側面を見逃すわけにはいかない。今後はこのような状況をふまえ、コース制を生かし、より生徒のあり方に寄り添った進路指導・学習指導について考えていく必要がある。

他方、特進クラスをはじめとした、大学進学希望者の進路選択自己効力を増大させることも課題である。2年次以降、今回行えなかった学力向上の成功体験や、職業体験・オープンキャンパス参加といった、進路選択自己効力をあげる可能性のある取り組みの実施と検証も必要である。

## 3 実践を終えて

高校1年生のキャリア教育により、進路意識を高めることが最初のねらいであったが、コース制導入初年度という実習校の事情もあり、コース選択プロセスへの支援と分析が主となった。結果的に、実践の成果・課題と、コース制の成果・課題の切り分けが難しくなってしまった。しかし、転換期を迎えた実習校に必要な支援と今後に向けた分析結果を提供することは出来たと思う。

## 参考文献

- ・ホランド, J.L. (渡辺三枝子・松本純平・館暁夫訳) (2013『ホランドの職業選択の理論』(原著 1997年), 雇用問題研究会
- ・木多功彦 (2010)「高等学校普通科におけるキャリア教育に関する実践研究」, 岡山大学教育実践総合センター『紀要』第10巻, pp. 105-116